第392号（令和４年１月11日㈫発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

南無阿弥陀仏

念仏往生の義を
ふかくもかたくも申さん人は
つや〳〵本願の義を
しらざる人と心得べし
（「和語灯録」巻五
『浄土宗全書』第九巻
六〇八頁）

おもふがごとく衆生を救う

名誉教授　森田眞円

〈娑婆の縁尽きて〉

新年明けましておめでとうございます。みなさん、それぞれに楽しいお正月を過ごされたことでしょう。いよいよ学校が始まり、学年末試験が近づいてきましたので、お正月気分を抜いて新しい年に向かって頑張って下さい。

私は現在、三回生の「仏教学ⅡB」を担当していますが、講義ではしばしば『歎異抄』を取り上げて親鸞さまのお言葉を紹介しています。『歎異抄』第九条では、親鸞さまのお弟子である唯円房との対話の中で、親鸞さまが、

なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり

（聖典85頁）

と述べられる一段があります。

この親鸞さまのお言葉について、私には忘れられない思い出が二つあります。一つは、私の兄との対話です。私の兄は医者ですが、今から四十年程前、兄が医者に成り立ての頃のことでした。新米の消化器系外科の医者であった兄は、あることで悩んでいました。当時は今と違って、癌になった患者さんに対して、癌であることを告知しないというのが常識でした。当時は癌は「不治の病」であった為、癌告知は「死の宣告」に他ならないと考えられていたからです。ですから、兄は自分の担当している患者さんから「先生、癌じゃないですよね?」と問われる度に、「大丈夫ですよ。癌じゃないですよ」と応え、最後まで嘘をつき続けなければなりません。患者さんは、担当の医者だけが頼りです。自分を信頼して下さっている患者さんにずーっと嘘をつき続け、そのまま最後まで本当のことを知らずに（どこかで感づかれるのでしょうが…）お亡くなりになっていきます。兄は、「人間の終わり方がこんな形で良いのだろうか?」と悩んでいたのです。

そんな難しい問題に、何の言葉もかけられなかった私ですが、親鸞さまの先の言葉を紹介しました。「どれほど名残おしく思っていても、この世の縁が尽きる時が必ずやってくる。その時、ただこの命が終わってしまうだけではなく、覚りの世界である『浄土』に摂め取られていく」という親鸞さまのお言葉を聞いた兄は、「ふ〜む。そんな終わり方が出来れば良いなあ」と呟いたことを思い出します。

〈遺された言葉〉

もう一つは、本学の卒業生のTさんとの思い出です。今から十五年程前のことです。Tさんは福井県のお寺の坊守さんですが、夫である住職さんが、癌で亡くなられました。その当時、高校生や中学生であった三人の子供さんたちを遺して亡くなられたのです。坊守さんであったTさんは、住職さんに代ってお寺の法務を勤めなければなりません。そこで、京都の西本願寺に通って、住職の資格を得る研修を受けられることとなったのです。

さまざまな研修の中には、もちろん親鸞さまの教えの内容を勉強する研修があります。たまたま、その研修の講師であった私とTさんとは、昔からの知己でした。そこで、休憩時間にいろいろ話をしていると、なにかの話から『歎異抄』のことが話題になりました。私が何気なく第九条の「なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり」という言葉を出して、親鸞さまと唯円さまとの対話の話をしていた時のことです。

ふと気がつくと、Tさんは眼にいっぱい涙を浮かべておられます。「どうかしましたか?」と私が尋ねると、Tさんはその涙の訳を語ってくださいました。その当時は既に癌を告知する時代になっていました。ですから、癌であることを承知しておられた夫の住職さんは、病気が重くなっていく中で、何度となくこの言葉を口にしておられたそうです。Tさんは、夫がよく口にする言葉の意味がよくわかっていなかったのですが、いまはじめて、この言葉が『歎異抄』第九条の言葉であったことを知ったと仰り、その意味を知って夫の心中を思い、思わず涙が溢れてきたのですと話されたのでした。

〈おもふがごとく救う〉

まだ成人していない子供たち三人を遺して往かねばならない。Tさんのことやお寺の後のことも随分気がかりであったに違いない。住職さんは、まさに「なごりをしく」思う気持ちでいっぱいであったことでしょう。けれども、どれほど「なごりをしく」思っても、娑婆の縁が尽きたなら力なくして終っていかねばなりません。

同じ『歎異抄』の第四条には、

浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり

（聖典82頁）

という親鸞さまのお言葉が記されています。

これは、浄土に生まれたものは直ちに仏さまとなって、今度は迷いの世界にいるものに対して大悲の活動をして、思い通り救うことができると示されているのです。先ほどの第九条の言葉と思い合わせると、執着や煩悩から離れられない私たちのような凡夫が歩んでいくべき往生成仏への道が示されているといえるでしょう。

この世に未練たっぷりであって、この世の執着から離れられない凡夫の身でありながらも、娑婆の縁が尽きたとき「かの土」である浄土に参らせていただき、仏のさとりに導かれることが定まっているのであります。そして、浄土の世界で速やかに仏のさとりを恵まれ、「大慈大悲心をもって、おもふがごとく衆生を利益する」と示されています。

住職さんは、どれほど名残おしく思ってもこの世の縁が尽きたならば、直ちに仏となって、Tさんや子供達に大悲の活動を行い「おもふがごとく救う」決意を自らに言い聞かせておられたに違いありません。凡夫の身でありながら、往生成仏の道を歩むとは、こういう生き方が恵まれることに他ならないのです。

ことばの窓 ⑦ 人との関係を映す鏡

或る家庭の朝の一齣を、妻の側から語った言葉―「朝起まして機嫌をきけば不図脇を向ひて庭の草花を態とらしき褒め詞、是にも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど」―これは、樋口一葉の小説「十三夜」（明治二十八年）の中の一節。女主人公のお関は路傍で見初められ、熱烈に求婚されて原田勇と結婚します。が、半年を経た頃から勇の態度が激変し、その後の約七年、一方ならぬ精神的苦痛に曝されながらもひたすら堪えてきた彼女は、遂に旧暦十三夜の夜、実家に戻り、離縁を両親に願い出ます。

本作で重要なのは、三人称の語り手が設定されているにも拘わらず、この夫婦の不仲は、勇を「鬼」と呼ぶお関の言葉によってのみ読者に伝えられ、勇の心中に何があるのかということを、語り手が語る機会を一葉が設けていない、という点です。先の引用の傍線部はお関の主観ですが、勇の真意はどうだったのか、それは、勇を非難するお関の言葉の端々から汲み取りながら読むしかありません。しかしそうやって作品の言葉を丁寧に読んでゆくと、一葉が描きたかったのが〈非道な男に虐げられる哀れな女〉といった単純なことではなかったことが見えてきます。勇に対して型通りの対応をするお関と、それに不満を持つ勇、冒頭の引用部も、作中のお関の他の言葉とつき合わせて眺めた時、別の相貌を表し始めます。人と人との心がすれ違い、届くべき人の心に思うように届かずに、行き場を失って彷徨う言葉がそこにはあります。

「ことばの窓」と題して国文学科の教員で繋いできました連載も今回で最終回となりました。人は言葉を用いて思考し、大切な人に思いを伝えようとしますが、自分の思いを相手に伝えることが如何に困難か、「十三夜」の夫婦のすれ違う言葉から、それが如実に感じられます。伝えようとするということは、同時に容易に伝わらないということを経験することでもあり、そういう人間同士の営みの中で生まれる悲喜こもごも、そうした情緒の花々が、文学作品の中には咲き乱れています。

一つの言葉もそれを交わし合う人同士の関係を鏡のように映し出し、その時々で様々な色合いを帯びます。通常言われたら不愉快かもしれない言葉も、好きな人から言われたら嬉しい、そういうこともあります。そう、連載第一回目で取りあげられていた「馬鹿」という言葉も、私にとってはそういう言葉の一つです。

（国文学科・峯村至津子）

澪標

私たちは、様々な形で、他のいのちとともにあり、あるいは他のいのちを奪いながら生きて行かざるを得ない。身近には食べ物としていただくこともあるし、地球規模で言えば、人間の諸活動の結果、たとえば気候変動がもたらされ、奪った自覚さえないままに多くのいのちを奪っている。

そのような私たちが、美辞麗句を並べて「いのちを大切に」等と言っても、それは上滑りした綺麗事になりかねない。

ところで、浄土真宗の礼拝行事は、私たち自身に向けられた阿弥陀仏の心に触れることが根本的な目的である。私たちの思いを仏に聞かせる行事ではない（少なくともそれは本義ではない）。大切なペットの死は悼むことができても、食卓に並ぶ肉や魚のいのちに心を向ける機会は少ない。

最近、ペットの葬儀について尋ねられた。身近な動物の死を通して、阿弥陀仏の心、すなわち煩悩に振り回される私たちの姿を見抜く確かな慈悲を聞くならば、大いに意味のある葬儀である。葬儀を含む浄土真宗の仏事は、私たち自身を目当てとして行われるのである。

阿弥陀仏の名前は、限りないはたらきを持つ仏、という意である。そのはたらきは、人知を超越し、私たちにとっては不可思議というよりほかない。先立ったペットたちを通して、阿弥陀仏のはたらきに触れたなら、そのペットたちは、私たちの心を仏教へと導いてくれた、宗教的先生であると受けとめることができるのである。

（義）

幹の研究・葉っぱの研究

家政学部教授　八田　一

京都女子大学でお世話になり24年目、勤続表彰25年には1年足らずに残念ですが、本年度末で定年退職いたします。みなさん、24年間、公私ともにお世話になり、大変ありがとうございました。定年を迎えるにあたり、「芬陀利華」編集者から原稿の依頼を受け、仏教や宗教に関係する文章になるかどうか自信はありませんが、卵の研究者が今、研究に対して何を感じ、何を思っているか書いてみます。

私は「卵の研究40年」とか「卵のことなら何でも」とか、教育研究活動で自分の専門を強調して積極的にアピールしてきました。その甲斐あってか、卵の研究では学会や業界やマスコミでも名前が知られるようになりました。思えば２００４年に初めてたまご研究会を開催し、10年間は会長を務めて名前が売れました。その後は副会長として日本たまご研究会事務局を担当し、毎年秋に本学のＢ５０１教室をお借りしてエッグサイエンスフォーラムを開催し２００～２５０名の参加者と交流してきました。特に、２０１８年には日本初の国際たまごシンポジウム@京都の議長を務め、世界の卵研究者とも連携することができました。

本年度は私にとって最終年度でありますが、卒研生８名および博士過程の学生１名と「卵のことなら何でも、All about hen eggs !」をモットーに鶏と卵に関する研究に取り組んでいます。そんな中で最近思うのですが、研究には幹の研究と葉っぱの研究があり、うまくバランスを取らないと社会に役立ついい研究ができないと思うようになりました。

そもそも研究って何でしょうか？　私は寝ても覚めても考え続ける知的作業だと思います。そのうちに考えが熟成し、問題を解決するべく仮説（アイデア）が出できます。実験をデザインし結果を出して仮説を検証します。どのような研究テーマにもオリジナリティが求められ、得られた研究成果により未知が既知になることはもとより、従来の不可能が可能になり、種々の問題を解決できるのが社会に役立つ研究だと思っています。

さて、この年齢になると学会や学術雑誌社から、投稿論文に対する査読審査依頼が増えてきます。特にこの５年は毎年鰻登りに増加し、いくらAll about hen eggs !をモットーとして卵関係の論文審査は全て受けるようにしていますが、物理的な時間には限度があります。ほぼ半数は中国人研究者の投稿論文で、昨今の欧米と中国の科学技術に関する覇権争いを何となく肌で感じます。

私の専門分野の論文査読で感じることは、年々、葉っぱの研究が多くなってきたことです。それどころか最近ではその葉から滴る雫のような研究が多く、たくさんお金をかけて緻密なデータを集め、重箱の隅を突くような狭い部分ではありますが、帰納的にかつ論理的に結論が導かれています。論文の構成としては非の打ちどころがないのですが、それでこの研究は何の役に立つのかと思ってしまいます。

問題はその論文の基になる幹の研究が見えないのです。研究で最も大切な背骨となる木の幹を見ず、枝や葉も越して、葉先から落ちる雫に着目するマニアックな研究には、夢や希望や驚きや感動が全く感じられません。今の世の中、分析技術や統計解析技術がおそろしく進歩し、しかもアウトソーシングが可能で、依頼すれば微に入り細を穿つデータが購入可能です。おそらく、溢れるデータをまとめるのに精一杯で研究の本質を深く考えることまで気が回っていないのです。

現在のネット検索技術を駆使すれば、研究室にいながら自分の専門に関する世界中の研究論文を瞬時に集めることが可能です。その中から自分の研究テーマに関するよく似た論文を探してフォーマットとして、同じように実験を組み立て、必要に応じて共同研究者を組織してデータを融通し合い、形を整えて論文投稿するという道筋ができているのだと思います。

各研究者は、競争的研究資金を獲得するのに論文数が必要であり、通常は論文の量産化を第一目的としています。そのためにも、自分の専門技術で種々の研究プロジェクトに参加し部分部分で協力する方が効率良く、木を見て森をみずならまだしも、葉っぱを見て幹が見えずの研究に陥ってしまうのだと思います。

昔のように図書館へこもって文献を検索し、実際に論文掲載誌を手にして興味深い論文を読みあさり、しばし沈思黙考し、さらに引用文献を書架から書架へと探しまくる作業経験が必要なのです。現在のネット社会で言うと、瞬時に集まるたくさんの情報をしっかり熟成させ、そこから生まれる研究アイデアの幹を確認したり、枝葉を考えたり、それを繰り返して、次第に自分の研究テーマのオリジナリティーを顕在化していく作業が必要だと思います。

要するに研究テーマはしっかり情報を詰め込み準備した頭の中の熟成を待って絞り出されるものであり、決して文献検索ソフトで既存の論文からフォーマットを探して行うものではないのです。当然、幹に近い研究の方がその成果の重要性も高くインパクトが強くやりがいがあります。私の経験では、幹の研究は10年に一度会えるかどうかです。それが太い幹であればあるほど育てがいがあり、枝葉もたくさん付きますので、一生もんの研究でライフワークとなります。

私のライフワークは鶏卵抗体IgY（感染症予防卵）の有効利用研究ですが、かくいう私も高齢者の仲間入りをし、本年度末で定年を迎えます。これからあと何年研究者でいられるかわかりませんが、寝ても覚めても24時間、研究のことを考えられる内はもう一つ幹に近いところで卵の研究ができたらと思っています。

法のことば

念仏往生の義を
ふかくもかたくも申さん人は
つゆ〳〵本願の義を
しらざる人と心得べし

（「和語灯録」巻五
『浄土宗全書』第九巻
六〇八頁）

法然上人の遺文や法語を収録した「和語灯録」には、「念仏往生の教えをあげつらい、難しくいう人は、本願の正しいいわれを知らない人である」と記されています。

なんでもかんでも頭で理解しようとし、「わかった」と合点して、知的理解を誇ってしまう。いつも注意しなくてはいけない大切なことです。「わかる」というのは、秩序を生む心の働きであり、自分の記憶などを土台として、その反応が形成される（山鳥重『「わかる」とはどういうことか』、ちくま新書）という指摘があります。あくまでも自分というフィルターをとおしてでしかないのです。

平等に救うという本願他力の念仏はどのような人にも届いているのであり、その主体は阿弥陀仏です。自分というフィルターをとおしてでは、決して「わからない」のです。「わからない」と受け止めることでこそ、開かれてくる世界があるのです。

（中西　俊英）

シリーズ　智慧の蔵㊷

『ねぇ、お坊さん教えてよ　死んだらどうなるの？』

岡崎秀麿・冨島信海　著　本願寺出版社　二〇二一年

仏教やお寺に関する素朴な疑問。でも、なかなかお坊さんには聞きづらい面がありますよね。そんな疑問・質問に浄土真宗本願寺派のお坊さんが丁寧に答えたのが本書。

「死後の世界はあるのか？」、「魂は残るのか？」、「死んでもまた、この世に生まれ変われるのか？」など、お坊さんが答えるからこそ意味がある質問をはじめ、計二十五の質問とその答えが掲載されている。中には、お坊さんとして答えにくいような質問もあると思うが、想定される場面ごとに答えを用意してくれている。

本書一冊あれば万事解決…と思いきや、著者は「本書が示した答えが不十分であることは間違いない…」と謙虚な姿勢を示している。しかし、本書が示す答えは、もちろん高水準に達しているだろうし、その内容は読み応えがある。それにも関わらず、著者の謙虚な言葉は何を伝えようとしているのだろうか。

著者は浄土真宗本願寺派総合研究所（以下、研究所）の二人の研究員。著者の二人は研究所では現代における葬送儀礼やお墓の課題について取り組んでおり、掲載された質問は業務で浮き彫りになった一般の方の素朴な悩みや疑問なども関係しているのだろう。

その意味で注目すべきは、「仏壇は買わなければならないのか」「お墓って何のためにあるのか」などの質問である。仏壇やお墓はお坊さんにとっては当たり前にあるものだが、現在の日本社会では人々の死生観が多様化し、それは仏壇やお墓のあり方にまで影響を及ぼしている。つまり仏壇やお墓があることが当たり前ではなくなっているのだ。そのような多様化した社会の中で、お坊さんが「常識」として考えてしまっている価値観を押しつけるのではなく、よりわかりやすいように、その「常識」を噛み砕いている。著者の謙虚な言葉は正解のない問題に挑むとともに、多様化した常識に対峙しようとしたことの表れなのだ。このことは、各設問の最後に付されているコラムの書き方からもわかる。このコラムはそれぞれの質問に関連した内容について、ふと疑問に思うことをやさしくかつ詳細に書かれている。本文に勝るとも劣らない秀逸なコーナーだ。

また多様化する社会だからこそ家族間でも多様な考えがあることが予想される。本書冒頭に「ご自身やご家族、ご親族の葬儀やお墓、仏事のことについて話し合う機会にしていただきたい」と書かれているように、センシティブな話こそ、しっかりと家族間で話し合い共有することの重要性も伝えたいのだろう。

本書と同時に『どうしてお葬式をするの？』も刊行されている。この本もお坊さんの常識だけで語ろうとはせず、一般の疑問にやさしく寄り添っている。こちらも合わせてご一読ください。

（野村　淳爾）